

誤答分析の方法論上の課題

— elicitation procedure について —

広島大学

深 沢 清 治

1. はじめに

外国語学習上の誤りが、不適切な教授・学習による習慣形成の結果として極度に忌避すべきものであるとする考えに対して、むしろ、誤りは言語習得の段階において不可避な活動であり、その記述・分析により、学習の過程や方略を解明しようとする動きは、誤答分析 (Error Analysis) と名づけられ、注目され始めてから久しい。学習者言語の研究の一方法論としての誤答分析は、多くの場合、自由な発話 (spontaneous speech) や課題作文などの分析を通じて誤りを発見・抽出し、それらを言語項目別、あるいは発生原因別に分類した試みであり、初期には、誤りの原因が以前に考えられていたような母国語からの干渉によるものばかりではないことを立証しようとする研究が多かった。誤答分析の過程で、このように誤りの原因分析への関心は高いが、誤答収集に関わる方法論については検討が不十分であったように思われる。そこで本論では、従来までのように、学習者の発話から誤りが表出するのを受身的に待って得られたデータがはたして、学習者言語を的確に表わすかどうか検討し、むしろ積極的に特定の誤りを誘出する方法により、学習者の中間言語体系をよりの確に把握し、前研究を補足する方法 (elicitation procedure) について考察していくことにする。

2. 誤答分析の方法

誤答分析の方法は、誤りの発見から処理に至るまで多くの外国語教師が経験的に熟知し、実行しているものであり、一般に次のようなプロセスを取る。

- ① データの収集
- ② 誤りの認知
- ③ 誤りの記述および分類 (言語項目別・原因別)
- ④ 誤りの出現頻度および重要度 (Error gravity) の調査
- ⑤ 学習困難点の発見および指導優先順位の決定

これらの成果が、誤答矯正、教材・教授法の改善へと活用されるのである。近年、誤答の分類や、誤答の理解可能性を中心とした誤答評価の研究の進展は目覚ましいが、データ収集の方法については、依然、初期の誤答分析によるそれと、ほとんど変化していないように思われる。最も信頼できる資料としては、たとえば、英語が第1言語として話される自然な環境での発話を分析したものが望ましいが、日本のように教室内で外国語として英語を学習する場合には、ある特定のテーマを与えて課題英作文を提出させ、その結果、表われた誤りを分析するのが最も手軽で一般に使用されている方法であろう。

これに対して、従来の誤答収集方法による分析資料の信頼性に疑問を投じた Corder (1973: 39-40) は、次の2つの制約を指摘する。第1は、外的制約 (external constraint) と呼ぶもので、教室のような環境で時間やトピックに制限を与えられて書いた作文は自発的データとは言い難い

こと、第2は、学習者は思った内容を表現する際に、自分の不得意な表現は避けて、自信のあるものを選択して安全策を取ろうとする可能性があるため、得られた資料は真に学習者言語を反映したものと言いだない、とする内的制約 (internal constraint) である。

このように、学習者には誤りを避けようとする傾向があることを最初に示したのは Duskova (1969: 29) である。その後、この現象を 'avoidance' と名づけ実験調査したのが Schachter (1974) である。それによれば、関係代名詞の制限用法の使用に関して、日本人を含む外国人学生の自由作文を分析した結果、日本人および中国人の作文には誤りが少なかったが、それから日本人にとって関係代名詞は難しくしないとするのは早合点で、むしろその構造が難しく不得意だったため、意識的に回避した結果だと分析するのである。というのは、アラブ系の言語には英語の関係代名詞に相当する構造があるため、それを英語にそのまま適用しようとした、母国語からの干渉と理由づけ、対照分析の予測力を再評価したものと言えよう。実際、使用頻度には2倍の開きがあるのがわかる (表1)。同様に、Kleinmann (1977) も誤答回避傾向の存在を追認している。

(表1) 関係代名詞の出現数と誤答率

	Correct	Error	Total	Percentage of errors
Persian	131	43	174	25
Arab	123	31	154	20
Chinese	67	9	76	12
Japanese	58	5	63	08
American	173	0	173	—

(Schachter 1974: 209)

このようにして、誤答分析においては、ある誤りの出現頻度がそのまま困難度と結びつかないこと、つまり表出した資料による誤答分析では、潜在的誤りを見落とす可能性が確認されたことから、これまでのデータを補足するためにも、学習者の選択を許さずに、発話を積極的に引き出す、あるいは無意識的に誘出する方法が開発されねばならない。そこで以下、Corder の提唱する誘出法 (elicitation procedure) の試みをいくつか追ってみたい。

3. 誘出法 (elicitation procedure) による誤答収集法

先述した通り、誤答分析のための資料は一般に、学習上のある特定の誤りを仮説し引き出すというよりは、他の目的のために作成されたテスト結果を利用することが多い。そこで、これまでの資料に欠如している点を実験によって補足していく必要がある。その際、従来の誤答分析や、対照分析の予測などに基づいて、ある特定の項目に限定して発話を誘い出すことが可能になる。そのような試みを、以下、いくつか拾い出してみる。

(1) 翻訳法 (Zydatiss 1974)

母国語から第2言語に翻訳を行なわせるもので、状況、内容が制限されるため、誤答回避が制限される。さらに、答の文頭を示しておけば、ある特定の構文の運用力をみることができる。

(例1)

私の兄がこの時計をくれた。

→ This watch ... (受身文)

これは、実際に翻訳をさせるものであるが、たとえば例1において誤答を含めた解答群を用意し、容認性を判断させることもできる。

(例2)

私の兄がこの時計をくれた。

- a. This watch was given me by my brother.
- b. This watch has me given me my brother.
- c. This is the watch my brother gave me.
- d. This watch gave me my brother.
- e. This watch my brother gave me.

ここで学習者は、内容が一致すると思われるものをいくつ選択してもよいと指示される。ここで、学習者自身の間言言語規則に従って、可否の判断を下すわけであるが、これにより、中間言語の発達レベルを把握することができよう。ここでの選択肢は、Corder (1973), Zydatiss (1974) の述べるように、学習者の実際の発話をもとにするのが望ましいが、その収集に当たっては従来の誤答分析の成果や教師の経験に待たねばならない。ただし、選択肢がすべての誤答を扱えないため、改良の余地が残されている。

このほかにも翻訳法を用いたものとして、大関(1977)が、文の種類(肯定、否定、疑問など)および文法事項(現在・過去時制、助動詞など)を組み合わせて57の例文を作り、日本語で2回ずつ口頭で読み40秒間で作文をさせるDTM(Direct Translation Method)を紹介している。

(2) 動詞挿入法(諏訪部 1979)

初級レベルの学習者にとって文の主語がどこまでをさすのかは一見、単純に見えて難しいことが多い。そこで、単文からbe(have)動詞を抜き出し、中学2、3年生を対象に動詞を入れて文を完成させ、主語決定の方略を明らかにしようとした試みである。この調査では、「主語はどこか」といった質問は行なわれず、既習教材をもとに次のような問題文が提示されている。

(例3) 主語把握をみるためのテスト

1. This a new watch. (is)
2. That boy my brother. (is)
3. That school library good books. (has)
4. The first day of the week Sunday. (is)
5. A girl from America in our class. (is)

その結果、主語の語数や述部の特徴などと、主語把握の困難度との関係などが報告されている¹⁾

(3) guised test 法(Ozasa 1979)

これは連続子音の発音と、発話に際しての注意度の関係をみた研究である。2回のテストのうち、1回目は連続子音を含む単語を発音させ、2回目には、その単語を含む文を読ませる。ただし、2回目には、1回目とは別の単語の発音を特にテストすると指示し、実際には、同じ発音箇所をチェックするのである。

1) たとえば、主語の語数が1語増加するごとに正答率が10%下がり、また、述部が前置詞の際、正答率が最も低いことなどを指摘している。

(例4)

連続子音の performance と注意度の関係

	Attentive performance	Inattentive performance
/kr/	cream	(Christmas) is <u>coming</u> .
/str/	straight	The (stray) dog was <u>dirty</u> .
/ksts/	texts	The <u>required</u> (texts) were on the reading list.

これにより、注意時と非注意時の発音の差を分析しようとするもので、学習者がそこに気づかないという点で典型的な誘出法の試みと言えよう。

誘出法はこのほかにも、elicited imitation (Ervin-Tripp 1974)、一連の絵を描写させるものや、クローズテストによるものなどがある。これらは、特定の項目について調査が可能であるため分析の簡便さや指導への即応性などに利点があり、従来の分析の結果を補足・確認することもできよう。

4. まとめ(誘出法の課題)

従来までのように表出したデータのみの分析では、たとえば1文で表現できる内容を、接続詞や関係代名詞の使用に自信がないため、学習者が2つの文で表現するという誤答回避行動を把握できない。これは、学習上あるいは伝達上の方略としては何ら問題はないが、困難点の発見という意味では見過ごせない。それゆえ、Corder (1973)の述べるように、表出データ(textual data)を、対照分析および外国語教師の経験により分析し、そこで得られた学習者の中間言語に関する仮説を、誘出法によって特定の項目について調査し、仮説を検証、補足、修正していけば、学習者の言語的直観に、より接近することができるであろう。方法論上、音韻レベルでは誤答回避の可能性が少ないことから、文法、語い、意味のレベルが中心になると予想され、今後、たとえば例2のような翻訳法を用いた場合に、いかに解答選択肢を集めるかが課題になろう。さらに、誤答収集の一方法としてのみでなく、常に誤答分析、あるいは第2言語習得過程の研究全体の一分野であることを認識しておく必要がある。

参考文献

- Corder, S. P. (1967), "The Significance of Learners' Errors," *IRAL*, 5, 4, 161-170.
_____ (1973), "The Elicitation of Interlanguage," in Svartvik (1973: 36-47).
Duskova, L. (1969), "On Sources of Errors in Foreign Languages," *IRAL*, 7, 1, 11-36.
Ervin-Tripp, S. (1974), "Is Second Language Learning Like the First?" *TESOL Q*, 8, 2, 111-127.
Johansson, S. (1975), *Papers in Contrastive Linguistics and Language Testing*. CWK Gleerup.
Kleinmann, H. H. (1977), "Avoidance Behavior in Adult Second Language Acquisition." *LL*, 27, 1, 93-107.
Ozasa, T. (小篠敏明) (1979), "A Study of English Phonology Learning: A Cross-Sectional Study in the Japanese Settings," 『鹿兒島大学教育学部研究紀要』第30巻, 169-200.
Schachter, J. (1974), "An Error in Error Analysis," *LL*, 24, 2, 205-214.
諏訪部真 (1979) 「誤答分析の実際—中学2, 3年生の主語把握について—(I)」 『長野工業高等専門学校紀要』No 10, 67-74.
Svartvik, J. (ed.) (1973), *Errata: Papers in Error Analysis*. CWK Gleerup.
Zydatiss, W. (1974), "Some Test Formats for Elicitation Procedure," *IRAL*, 7, 1, 279-286.